

ポストケインジアン研究会@早稲田大学

ポストケインズ派の経済学 と 古典派価値論

中央大学

塩沢由典

国際価値論について

●根岸隆 2011.7.8

- 我国では国際経済学者は経済学説史に関心がうすく、経済学説史家は国際経済学にうといという傾向がありました...

●経済理論

- 国内経済・一国経済
- 国際経済
 - ◆ 貿易論(ミクロ)
 - ◆ 国際金融論(マクロ)

経済理論についての貿易論

●『リカード貿易理論の最終解決』第4章

- 貿易理論が古典派と新古典派の分岐点になった。
- リカード/マルクスが残した問題
 - ◆ 国際貿易状況では根本的修正を要する。
 - ◆ 問題>国際価値論を構成する。(古典派価値論と調和するように)
- J.S.Mill 1844/1848
 - ◆ 交易条件が未確定
 - ◆ 需要条件>相互需要論

リカード貿易理論の最小モデル

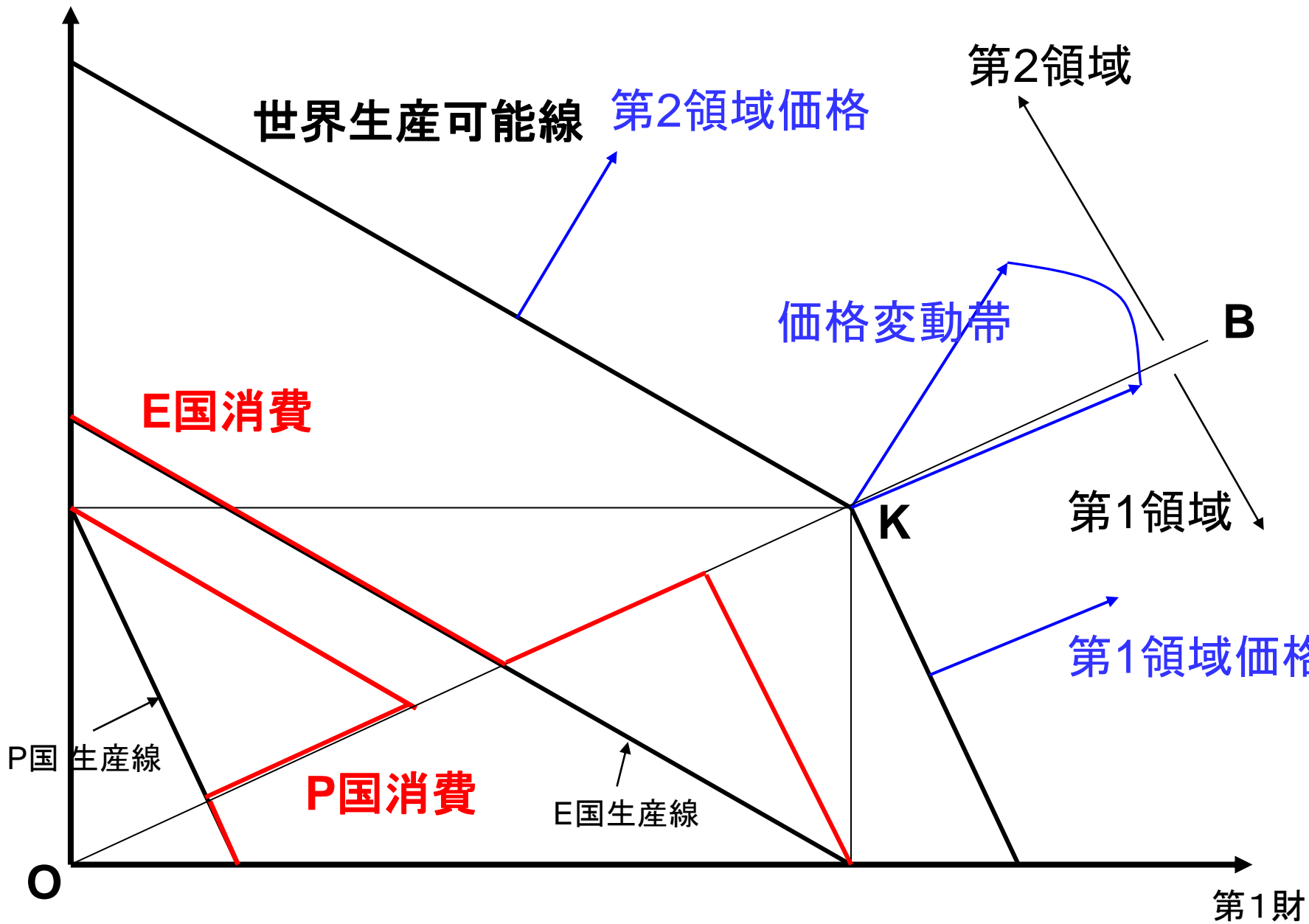
● 2国2財の数値モデル

- リカード、J.S.ミル、P.サミュエルソン
- 英国が毛織物、葡国が葡萄酒に完全特化
- 両国の労働力量が与えられれば生産量確定
- 生産は入っていても、純粹交換経済

● 2国3財の場合(最小モデル)

- 完全特化点(MJ点)は存在しない。
- 一般にM国N財($M < N$)ではMJ点は存在しない。

第2財



世界生産可能線 第2領域価格

第2領域

価格変動帯

E国消費

B

第1領域

K

第1領域価格

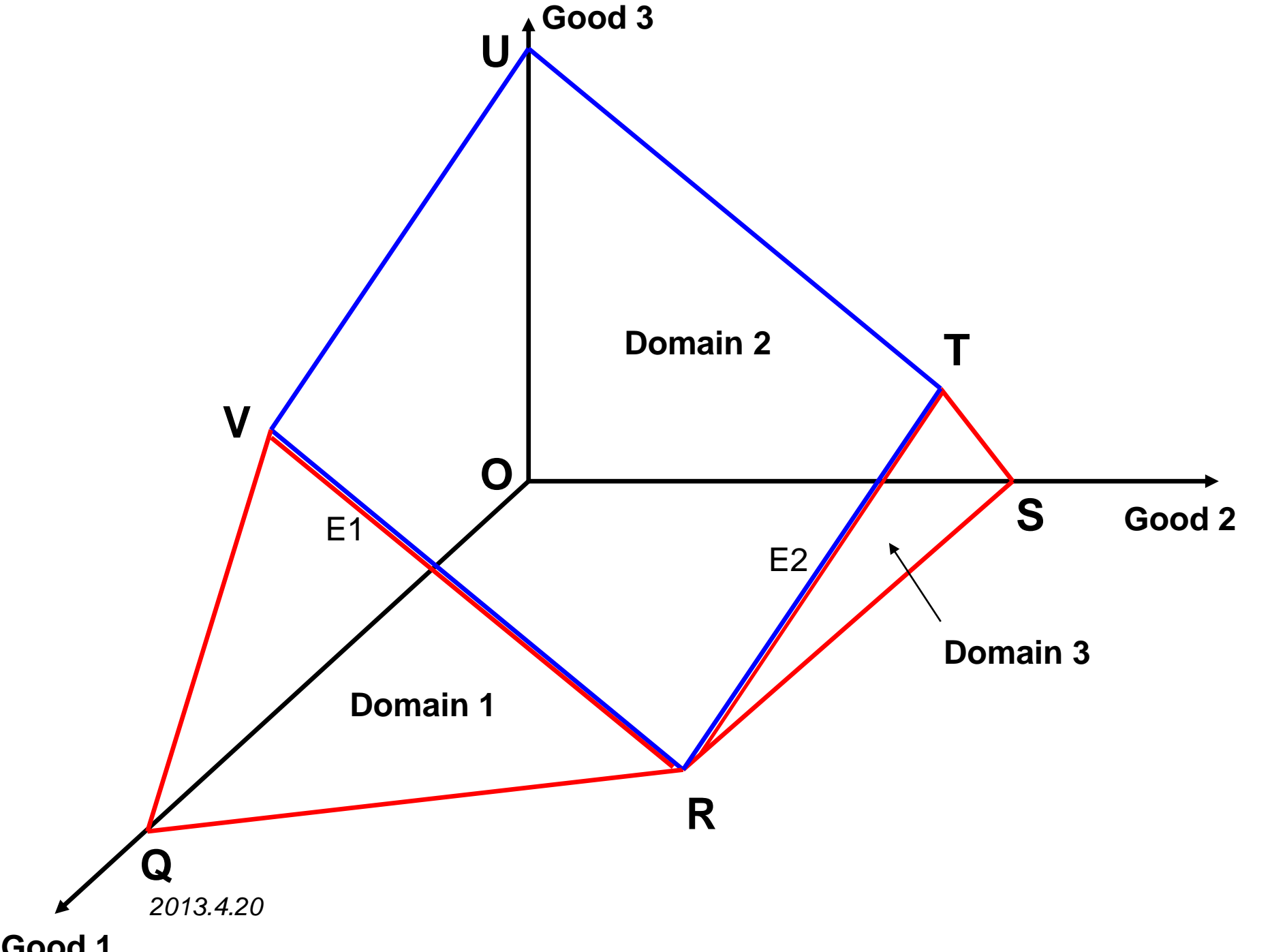
P国生産線

P国消費

E国生産線

O

第1財



リカード貿易問題の最終解決

●塩沢(2007), Shiozawa(2007)

- M国N財

- 技術選択が明示的に考慮されている。

- 投入財が貿易される。

 - ◆McKenzie, Jonesが試みてできなかったこと

 - ◆イギリスで綿花を栽培しなければならないとしたら、ランカシャーに綿工業は成立しなかった。

●塩沢(2014)

- 理論の再構成、学説史上の意義

国際価値論の概略

- 国際価値(賃金率ベクトル+価格ベクトル) M国N財ならM+N次ベクトル
- すべての財は、国を超えて貿易される。
- 前提:
 - 価格理論 各国各産業に一定の上乗せ率を仮定
 - 各国各財ごと複数の線形の技術がある。
 - 各国の労働力量が所与
 - 正則な国際価値 すべての国で完全雇用が成立

おもな帰結

- 世界需要が正則領域にあるならば、正則価値は定数倍を除いて一義的に定まる。(基本定理)
- 同一の正則領域に留まるならば、正則価値は一定
- 正則な国際価値以外の国際価値では競争的に生産しながら各国の完全雇用を成立させることはできない。

国内価値論

● 価値論

- 労働価値説ではない。

● 古典派価値論の現代的展開

- リカード 1817労働価値説 18/19 修正
- P.Sraffa 1960 $1+r$ を前提 菱山泉
- 塩沢(2007, 2014) $1+m(i,j)$ 『解決』補論
- 『経済学を再建する』提案編第3章・第4章
- 藤本隆宏 現場派経営学、全部直接原価計算

ケインズに戻れ?

- リーマンショック>>欧通貨危機
- 学術書
 - Skidelsky 2009 Keynes: The Return of the Master
 - Hirai, etc. (Ed.) 2010 The Return to Keynes
 - Harcourt 2011 書評 他に2冊
- 新しい運動
 - Institute for New Economic Thinking
 - Real World Economics
- わたしの印象 政策への帰還でよいか

いかなるケインズか(『再建』第1章)

- 1975年以降? New Keynesians?
- 1936～1975年代まで
 - いろいろある。
 - なぜ、ケインズ反革命が起こったか。
- ケインズ自身? 例: Harcourt(2011)
 - マルクス原理主義と同じ運命に
- いずれも不十分? 本報告の立場

ケインズ経済学の失敗

- 1980年代以降のケインズ反革命
 - なぜNew Classicalが登場できたのか？
 - New Keynesiansはなぜダメなのか？
- さまざまなKeynesians?
 - やれることはほぼ尽くされている。
- 原点に帰る？『一般理論』かKeynes？
- なぜKeynesは失敗したのか
 - 構想は良かった。基礎の経済学に問題。
 - Marshallの経済学（Keynesが古典派と呼んだもの）

新しい挑戦

●ブレークスルーが必要

- Keynesの(部分的に)成し遂げたこと

- 市村惇信『ブレークスルー のために』

 - ◆ 追究しなければ確率はきわめて低い。

 - ◆ 現在の理論や技術の「可能性の限界」

●既存の追求方向:「のびしろ」が小さい。

⇒ 基礎理論の取替え

●均衡理論のとらえ方

均衡分析か過程分析か

● 均衡分析

- 『一般理論』最終段階で均衡・限界分析を導入
- ワルラスかマーシャルか
 - ◆ Bowles『制度と進化のミクロ経済学』
 - ◆ ポスト・ワルラシアン、価格理論を持たない
- 森嶋通夫 A&Dに批判的、von Neumann
- 根岸隆 マクロ経済学のミクロ的基礎づけ

● 過程分析『再建』第2章、塩沢(2011) 「ケインズの構想と古典派価値論」

経済学における二大価値論

● 古典派価値論 vs. 新古典派価値論

- Ricardoが典型(利潤を含む)、Marx, Sraffa, ...
- A. Smithには混在、リカード反動(M. Dobb)
- Ricardoは「需要供給の理論」を俗説として否定
- 生産費(リカード>スラッファ>藤本隆宏/塩沢)

● なぜ新古典派革命がおこったか

- 需要の役割に目覚めた?
- 古典派価値論の「欠けた輪」>国際価値論

価値論の分岐点

● J.S. Mill 比較生産費説の解釈

- 国際価値の不確定問題 20代前半
- 2国2財完全特化の場合⇒相互需要説
- 『原理』: 古典価値論と需要供給の理論の並存

● 新古典派の価値論(Catallactics)

- なぜ19世紀後半のCatallactics?
- Mill > Jevons, Edgeworth, Marshall

● なぜ？

古典派価値論 vs. 新古典派価値論

●新古典派価値論

- 所与の資源の活用(野下: 経済を資源配分として)
- 地下資源・資本:完全利用 労働:完全雇用
 - ◆一般均衡理論
 - ◆HOS理論(国際貿易)
- 非貨幣的(貨幣:第N+1番目の財)

●古典派価値論

- 生産費が価格を決める。→フルコスト
- 散逸構造(Dissipative Structure<Prigogine)

散逸構造の一例：ろうそくの火

●環境

- 酸素を含む空気
- 空気の循環

●火/蝋燭の芯

- 熱で蝋を溶かし、吸い上げる。

●火が資源使用量を決める。



ケインズの構想の古典派的側面

- 経済が資源利用量を決める。
 - 資本稼働率、雇用率/失業率
 - 土地・地下資源の利用率
- 価格調節と数量調節の(暫定的)独立
- 貨幣経済
- 古典派経済学(Ricardo, Marx)
 - 経済(人口、食料需要量)が限界耕作地を決定。
 - 自然価格、価格ですべてを調節しない。
 - 貨幣経済(とくにMarx: M-C-P-C'-M')

過程分析1(塩沢2011、§5)

●過程分析

■期間分析との相違

◆Hicksの週 期間の内部は均衡

■一時均衡の移動ではない。

●基本

■経済主体が一時に一つ行動する。

■視野・合理性・働きかけの限界

■定型行動/プログラム行動

■相対取引(例:売手が価格、買手が数量を決定)

過程分析2 Monetary theory of production (同 § 6.)

● Patinkin vs. Clower

- **Clower**: 貨幣は財を買い、財は貨幣を買うが、財で財を買うことはできない。
- **Patinkin**: 貨幣は財を買うが、財は貨幣を買わない。

● どちらが正しいか

- **Clower**: より Neo-Walrassian的
- **Patinkin**: タルムードの影響?

カルビーの広告(1977)

- http://www.youtube.com/watch?v=k_tiFTEHJzY



百円でカルビー・ポテトチップスは買えますが、カルビー・ポテトチップスで百円は買えません。あしからず。

古典派価値論と数量調節(§ 8.)

● 価格決定と数量決定

- 相互に一定の独立性をもつ。
- 数量とは独立に価格を決めうる。(P. Sraffa)
- 価格が動いても、一定の数量関係がありうる。

● 最終需要 $I + C (+Ex)$ が一定なら

最小価格定理から雇用労働量 L が決まる。

$$L = \langle \mathbf{a}_0, \mathbf{y} \rangle, \quad \mathbf{y} - \mathbf{y}A = I + C (+Ex) \text{ [ベクトル]}$$

● Hicks, 森嶋通夫 固定価格の方法?

過程分析における有効需要(§ 9.)

● 谷口・森岡の定理

消費需要 I 最終需要が緩やかに変化するなら、過去の売行きの数期平均により、生産は基本的には需要に追随できる。

● C が長期に低迷(日本:失われた20年)

- I を拡大するインセンティブなし。
- G を短期的に増やしても、 I を増やす決断は？
- 政府投資の無効性

設備投資と利子率(§ 10.)

●ケインズの「資本の限界効率」

- 内部収益率と同概念

- この場合の投資は？

 - ◆ 証券投資？

 - ◆ 実物投資？（生産設備建設への投資？）

●もし実物投資なら

- $r^* > i$ でも製品に対する需要の伸びが見込めなければ、投資はしない。

- 数量と価格[利子率]の分離

金融資産市場と実体経済(§ 11.)

● 実体経済と金融資産市場との分離

- 実体経済 古典派価値論、フルコスト原理
- 金融市場 原価なし。価格理論は？

● 金融資産市場の経済学

● 相互の関係

- 実体経済 → 金融市場 過剰貯蓄($S > I$)
- 金融市場 → 実体経済 貨幣不足 > 有効需要不足

中間的結論 (§ 12.)

- 金融資産市場と実体経済の2重経済
- 実体経済
 - 古典派経済学の上にケインズを再構成できる。
- 金融市場
 - 信用創造論(貨幣創造)
 - 過剰資金の金融資産市場での運動
- 相互作用の分析

まとめ

● 古典派価値論

- 地代論、国際価値論
- 現代的展開(藤本「全部直接原価」)

● 過程分析

- 循環>ケネー、リカード、マルクス、スラッフア
- 『貨幣論』のケインズ(とロバートソンら)

● ブレークスルーへの戦略

- 古典派価値論と過程分析によりケインズの構想を実現する。